

ペアトレと環境作り

第4回 子どもの脳に届く話し方3か条

こんにちは。
今回からは接し方について
何回かに分けてお話ししたいと思います。

《子どもの脳に届く話し方3か条》

- 「十分な“間”をとって話す」
- 「短い言葉で話す」
- 「穏やかに話す」

●第1条 十分な間をとって話す

脳の発達 = 処理スピードが早くなる

↓

正確な処理をゆっくり行うことが必要！

- ・正しい脳のルートさえできれば
繰り返すことで必ずスピードはアップ!!
- ・処理のルートが定まっていない段階で
子どもの行動をせかすことは
脳の発育には逆効果!!
- ・親にとっては子どもの返事や行動が「遅い」と感じてしまいます

↓

子どもの脳の処理はゆっくり進む

↓

必ず十分な「間」が必要 心持ちゆっくり話す

● 第2条 短い言葉で話す

脳が「分かった」 = 酸素を使う

脳が「分からなかった」 = 酸素を使わない
(細胞が働かない)

↓

酸素を使わなければ脳は伸びない

- ・ 子どもは記憶の容量が少ない

||

長い話×(話の一部しか覚えていない)

↓

短く

端的に

- ・ 聴覚が苦手

↓

結論を先に伝え

理由は後で手短に

- ・ 指示をする

||

指示を実行するとどんなメリットがあるかを話す

↓

指示の意味理解ができ

ただ指示に従うよりも

脳を広く使うことができる

● 第3条 穏やかに話す

☆何より大切なのは

穏やかな声で話すこと!!

- ・発達障害ではほとんど感覚系が苦手

↓

※話し手の真意を読み取ることが苦手

※強く言いすぎる = 萎縮・反発

※子どもの理解の妨げ

※理解系の活動が思うように進まず

素直に受け入れることができない

- ・ 大事なことを伝える

→穏やかな声で

→そっと短く話す

↓

理解系が言葉を受ける

↓

次の思考や行動へ

脳の活動が進みやすくなる

子どもの反応の遅さにイライラしてしまい、

ついキツイ口調になりがちと思います。

また、間が待てず、指示を次々入れてしまいやすいのではないのでしょうか？

子どもと話す時は

自分自身の中で一呼吸置いて、

心に少しでも余裕を持って

話してみてくださいね。

参考・引用文献：発達障害の子どもを伸ばす 脳番地トレーニング

加藤俊徳著